1

しかも、

れ、その延長線上にまもなく田中訪中が実現 策について、いわば「泥繩」式の選択を迫ら

## 友好の機 熟すればこそ

「ただいま疾走中」の政府が熟慮すべき三つの問題点

まれて汗をふきふき登場した田中新首相は、 に、総数公選といっても所詮はコップのなか の運命を決せんとしている周恩来総理の眼 にいま、中国の政治的実権を掌握し七億人民 に、「喰うか喰われるかの階級闘争」の果て ば、文化大革命、そして林彪異変というよう おそらく、ほほえましくも親しみやすく、そ の台風一過、今太閤を称える日本的情緒に包 して与しやすい対象として映じたにちがいな あえていささかシニカルな見方をするなら 田中新内閣と周恩来ゲーム 田中新内閣は、その成立までの過 田中政権にたいし矢継早に秋波を送りつづけ 意で、かつ与党内のコンセンサスも不十分な 向けてすでに久しく過熱しつくしている。こ る立場に転ずるなら、情勢はどのように変化 が、一転して、みずからが主導的に日中打開 を次第に高めようとする立場にあった中国 拒むことによって日本側のシグナルの透明度 っかなびっくり送っていたシグナルを頑なに のような状況のなかで、従来は、日本側がお る。そして、マスコミの主潮は日中正常化へ 三派協定を背景にしていたし、過日訪中した 程において、日中正常化へ向けてのいわゆる へのシグナルを送り、発足早々すべてに不用 ばかりの三木武夫氏を閣僚に登用しても 流動化するであろうか。炯眼の周総理が

> (東京外湖路大学助教授 嶺" 雄"

化にかかわる軍大な諸懸案と対中交渉の具体 して、このように急テンポな事態の発展につ かったにもかかわらず、いまや日中関係正常 いては、自民党も外務省当局も予想していな る」と発言したものの、これまでの経緯から 新首相は、日中正常化への「機は熟してい かれていたのかもしれない。こうして、田中 の状況は、あるいはすでに周総理の胸中に描 国における日中正常化への急テンポな諸展開 が発言して以来、今日まで約二カ月間のわが 促進すると述べたことを歓迎する」と周総理 この点を考えなかったはずはないであろう。 去る七月九日、「田中内閣が日中正常化を

(92)

政権こそ、自中正常化のための今日的な気運

であろうか とに比べてみて、なんと幸運かつ容易なこと 拗な反操が予想される案件を強行採決するこ れを内政面から見た場合、たとえば野党の執 中交渉に臨むことができるということは、こ 廉」のムードをいやがうえにも醸成しつつ日 るこのような潮流に乗ることができ、「脱佐 直面した矢先に、与・野党を打って一丸とす 常化という、わが国戦後外交の最大の懸案に に起因していたことを包えば、日中関係の正 い。戦後日本の内政的係争の多くが外交問題 わめてラッキーであることはいうまでもな とは、田中内閣にとって、いまのところ、き な潮流がいま大きく流れだしているというこ いていることも十分に理解できる。このよう べき総選挙に臨もうとする内政上の考別が働 首脳会談の成果をバックにして、近く来たる ムードと浏流に乗ることは必要であり、日中 もとより、田中内閣にとって、当面、この

のだともいえるのであり、だとすれば、佐腰があくまでも「待ちの政治」に徹すること権があくまでも「待ちの政治」に徹することをいったが皮肉にもそのような潮流は、佐藤前政だが皮肉にもそのような潮流は、佐藤前政

う。当面する日中交渉をはじめ、日米関係の うなものであろうが、国際化時代といわれる だけでは新外交の持続的展開は不可能であろ 力こそが必要であり、たんなるムードや気運 動する国際環境にたいする鋭い分析力と構想 資を考慮したとき、今後の日本外交には、流 経済大国・日本への不信や猜疑が渦巻く今日 再調整、日ソ平和条約交渉などをひかえて、 内外から迫られている今日の情勢からすれ 国外交姿勢の新しい選択と主体的な対応とが き、外交の機欲というものは、畢竟、このよ 可能にもなってくる。ある意味で政治の動 となく方向づけてゆかねばならないという重 の世界のなかで、わが国の対外姿勢を誤るこ のなら、いささかの楽観も許されないであろ ば、流れにのみ身をまかせるその前途である 七〇年代の流動する国際関係のなかで、わが の真の形成者であったという逆説的な評価が

との会見)。

きわめて的確な対日認識を保持しているようめて検討するが、少なくとも周恩米総理は、あるのであり、この点については、のちに改あるのであり、この点については、のちに改あるのであり、この点については、のちに改

この周恩来発言は、今日の日来関係にたいこの周恩来発言は、今日の日来関係について、このように透徹した認識が作用していることを、われわれは忘れてはなるまい。しかも、従来の中国は、かつて毛沢東がで毛沢東選集』巻頭を飾る論文の冒頭で、「誰がわれわれの敵であるか、誰がわれわれの敵であるか、離がわれわれの敵であるか。この問題は革命の第一の重要問題

うとしているとき、国際関係における友敵関 者にたいして最近言明したという。 方が敵になる」時代であることを、ある訪中 あり、今日の世界は、「敵が味方になり、味 とも周恩来総理は十分に認識しているようで 係がきわめて流動化しつつあることを少なく 今日では、中国自身が国際化時代に対応しよ である」(「中国社会各階級の分析」)と強調 した観点を世界認識の基礎にすえていたが、

相手に示そうとする過当競争となって連日新 診すべき諸懸案や日中共同宣言案まで公表さ 発言とか政府筋とか外務省筋とかいう公式ル 選択の幅はほとんどなくなろうとしているか さえ、国際関係の諸要因を考慮した自主的な 聞の紙面を賑わし、首相の訪中時期について 日中交渉に臨むわが国の手のうちを、競って ミをベース・メーカーにひた走っているばか は、依然としてムードと気運のなかでマスコ たいして非礼でなければ、卑屈さを装った思 れるという有様である。これは、交渉相手に に一時は感じられた。あまつさえ、政府首脳 りの観がある。そうした疾走は、来たるべき 近の方法にたいして、わが国の最近の状況 ートによって、日中交渉においてはじめて打 このような中国側の周到なる認識と対日接

> 国側が本当に信用するのであろうか。 いあがりであり、このような日本の対応を中

中異常化とも思われる最近の状況について、 る。つまり、日中正常化どころか、むしろ日 その真意をたださざるを得なかったようであ 近のわが国の状況には、おそらくキッシンジ そのような交渉は不可能であるとしても、最 交史に残る傑作であった。わが国の立場で、 待ち受けていたが、会談の全容はいまにいた は当然であろう。 る。過般の米中会談では、どのような共同コ いまや世界が疑心暗鬼になったとしてもそれ ャー氏も当惑し、急速、軽井沢にまで飛んで ュニケは、まさに外交折衝の妙という点で外 ミュニケが出るか、全世界はかたずを吞んで っても明らかでないかわりに、米中共同コミ それほど中国は甘くはないように思われ

### 2 日中接近を急ぐ中国の事情

に通産相に就任した中質根康弘氏について 保守本命であるのに、また、たとえば、新た 今日、有効に作用しつつあるとしても、田中 内閣は、本質的には不細工な佐藤政権以上の ところで、日中関係打開への周恩来戦略が

> 積極的になったのであろうか が、今日のように日中関係の打開にきわめて 示しはじめたのであろうか。なぜ、中国の側 してまで、なぜ中国はこのように「好意」を 身の変り身の早さについてはさておき、氏の のに、その中替根氏を含む個々の閣僚にたい 体質が本質的に変ったとは決して思われない しく非難していたのに、そして、中會根氏自 本軍国主義復活」の象徴的人物とみなして激 は、かつて中国が四次防をめぐって彼を「日

日中交渉においても、日中関係の長期的安定 て重要であると思われる。 の方向を将来的に模索するうえでも、きわめ この点を冷静に見きわめることは、今後の

たようにも思われる。 らば、中国はここ半年間ほど、対日政策の転 明であり、とくに、昨年後半以来、日米安保 さ」のあらわれではなく、むしろ、その逆証 あると考えており、佐藤政権にたいする中国 換をすでにはかりつつあったと思われる兆候 もあって、むしろ一つのキッカケを待ってい が急速に消えはじめていったことを考えるな 体制への批判や「日本軍国主義」非難の論調 の強い拒絶反応は、必ずしも中国側の「強 私は、そこには、中国なりの重大な事情が

あろうか。ここでは、次の四点を指摘してみ では、中国側の事情とはどのようなもので

ろうとしているかのようであり、「文革よ、 さらに強まりつつあり、今日では、脱文本化 性をそこに見ないわけにはゆかない。このよ の幅とその硬軟の振幅を規定する条件が、つ あるようだ。 さらば」は、ますます明白な事実になりつつ 国人はいま、文革を一場の悪夢として忘れ去 から非文革化へと状況は転換しつつある。中 の著しい脱文革化傾向であるが、この傾向は うな内政面の変化とは、周知のように、最近 延長である」という常識を超えた著しい相関 までのブロセスからすれば、「外交は内政の ねに内政面にあるという中国外交決定のこれ かわる問題である。そして、中国の対外政策 まず第一には、中国内政の著しい変化にか

たんに旧幹部の復権にとどまらず、これまで ダーシップが強化拡大されつつあることは、 おこう。こうした状況のなかで周恩来のリー 理由付けもなされつつあることをつけ加えて そ、「野心家・陰謀家」林彪であったとする いまさらいうまでもないが、周恩来は今日、 この場合、その悪夢をもたらした元凶こ

> 思われる。 からの人的資本を再び拡充しつつあるように た多くの人材を救済することによって、みず ンペーンにおいて、理不尽にも失墜していっ のいくたびかの路線闘争や大衆的批判のキャ

わぬ人物がさらに復権するかもしれない。 見るならば、中国民衆に悪の代名詞として教 司令として逮捕された陳再道・元武漢軍区司 帰、はたまた六七年の武漢事件で現地反乱軍 され、失墜していった中堅指導者層の戦線復 直系として文革初期にまず第一に激しく批判 記、呉冷西・元新華社社長ら、劉少奇=彭真 理がカムバックしたこと、楊勇・元副総参謀 踊進」 政策批判者として知られた陳雲・副総 って失墜したまま消息を絶って以来なんと十 主諸党派の代表的知識人で著名な社会学者で 彭徳懐グループ、旧実権派を貫き連ねて、思 え込まれた人物以外は、旧「右派分子」、 令の再出現、等々という最近の一連の傾向を 長、胡耀邦·元中国共産主義青年団第一書 て失脚した彭徳懐・元国防部長とともに「大 数年ぶりに姿をあらわしたこと、五八年の あった費孝通がその年後半の反右派闘争によ 「大躍進」政策にまっこうから批判をぶつけ 一九五七年の「百家争鳴」期に活躍した民 旧 0

> なっている。 復権があり得ないとは、いまや断言しにくく まり、劉少奇の復権はあり得ずとも鄧小平の

もたらしつつ、中国外交の選択肢を大きく拡 が、ともかく、以上のような内政上の変化 重ねあわせて考えるならば、いまや中国内政 り、林彪批判を超えた「毛沢東批判」がそこ が示した、あまりにも含意の多い表現へつま どのようにデューリングの先験論を批判した 大することになった。 は、周恩来のリーダーシップの著しい台頭を ない」と聞かされてギクリとしたことがある 重大な問題が潜んでいるのかもしれない)を 的権威の低下といっただけではすまされない 革体制からの離脱傾向ないしは毛沢東の絶対 に内在していると私には思われ、そこには文 か――『反デューリング論』学習ノートー 識人から、「最後に笑うのは周恩来かもしれ の展開方向は明らかであろう。私はいまから いう問題を考え、さらに本年一月二十八日付 少奇路線」、「毛沢東体制下の非毛沢東化」と 一年半ほどまえに、香港に逃れたある中国知 『人民日報』の王澈署名論文『エンゲルスは このような傾向のなかで、「劉少奇なき劉

したがって、第二には、「革命外交」にか

わって「国家外交」が重視されつつあることだが、今日の中国が「文革よ、さらば」ととだが、今日の中国が「文革よ、さらば」ととが、今日の中国が「文革よ、さらば」ととが、今日の独立闘争=バングラデシュ樹立にたいする中国の対応にもっともはっきりとあらわれていた。そして、今日、明白に「毛沢東思想」を掲げて地下に再建されたフィリビン共産党が、最近でもルソン島中・北部でゲリラ活動を展開しているにもかかわらず、「人民日報』は、フィリビン共産党の活動がりをよったく報道しなくなったことなどに見られるように、AA地域の革命努力への冷たい対るように、AA地域の革命努力への冷たい対るように、AA地域の革命努力への冷たい対るように、AA地域の革命努力への冷たい対るが、最近でもルソン島中・北部でゲリラ活動を展開しているにもかかわらず、「人民報」という。

その場合、国連に参加した中国がみずからの国際政治上の地位を十分に認識しはじめたった「国家外交」の象徴的な 帰 結 で あったうな「国家外交」の象徴的な 帰 結 で あったが、米中接近は、その歴史的意義の大きさにが、米中接近は、その歴史的意義の大きさにが、米中接近は、その歴史的意義の大きさにが、米中接近は、その歴史的意義の大きさにが、米中接近は、その歴史的意義の大きさにが、米中接近は、その歴史的な場合に、東京ない、大学のよりに認識しばいる。

ドシナ半島にいたるまで、昨年夏以来、印ソ 網はほぼ完成しつつあるのである。 海峡と日本列島を残して、ソ連の対中国包囲 によってソ連は著しく勢力を伸張させ、台湾 現、米中接近へのハノイの反撥と北ヴェトナ 条約の締結、印パ戦争、バングラデシュ出 つあることである。モンゴルを含む中国北辺 とは、ソ連の対中国包囲網が潜々と完成しつ 中心とする世界地図を描いてみて明らかなこ くにソ連の対日接近との競合という問題がク 切実な関係の重要性を崩感したのであろう とを、中国は思い知ったのではなかろうか。 ムにたいするソ連の影響力の増大等々の事実 の国境はもとより南のインド亜大陸からイン ローズ・アップしつつあった。今日、中国を が、ここに第三の要因としてソ連の存在、と らべて米中関係は依然として「虚」であるこ ばならないことなど、日中関係の「実」にく と米大統領選挙後のアメリカの対応をまたね そのようなとき、中国は、改めて日中間の

ことを最大の脅威とする中国は、この点を大うとしている。経済大国・日本がソ連と結ぶっとしている。経済大国・日本がソ連と結ぶらとしている。経済大国・日本がソ連と結ぶのというなどき、ソ連は、去る一月のグロ

れまで、一つの経済建設方針が、わずか五年と な工業化をもはやこれ以上選らせることがで 中国が長期安定的な経済建設、つまり本格的 関連する最大の基本的要因であるが、今日の これらの問題で手を打ってきたのである。だ その延長線上にはチュメニ油田を含むシベリ その再配分などの経済路線第一主義であり、 恩米総理にしてみれば、田中内閣の本来的な って印象づけられた第二次五カ年計画期、大 の第一次五カ年計画期、「大躍進」政策によ 済復興期は例外としても、「過渡期の総路線」 して貫徹されたことはなかった。革命後の経 きないという事情である。想えば、中国はこ そ、中国にとって差し迫った課題であった。 の姿勢の転換をいやがうえにも迫ることこ べき体質をもつ田中内閣とそれを支える財界 とすれば、本来的には対中よりも対ソに向う はなかろうか。現に田中氏は通産相時代から、 ア開発との関連があることをかぎとったので れは結局、日本の経済的再編、資源の調達と 日本列島改造論をひっさげて登場したが、そ あろう。つまり田中首相は、周知のように、 体質をいちはやく読みとることができたので いに考慮したにちがいない。しかも烱眼の周 そして、第四には、以上のすべての要因と

### ウッカリし られません

沢東の「革命」によっては、もはや大衆を二 に登場せねばならない時代であり、他方では、 度と繰り返すことができない。しかも現在 命は、先にみたような帰籍を今日とげつつあ 死存亡を賭けた革命であったはずの文化大茶 度と熱狂させることはできないであろう。な な事態を招いてしまった。 るのであり、しかも、林彪事件という衝撃的 ぜなら、中国にとってまさに民族と国家の生 貧困のユートピア」(モラピア)を夢みた毛 一方で中国がいよいよ本格的に国際社会

とって、このような不安定な状況は、もう二 大革命の混乱期を経て今日にいたった中国に 躍進」政策挫折後の経済調整期、そして文化

の最大の推進者であった林彪副主席が、 主席の後継者として教えこまれ、文化大革命 「革命」のためのもっとも忠実な指導者、毛 こと

質のなかでじっと耐えているのではないか。 知らされ、面従腹背という中国人の伝統的体 い重大な中間項が抜け落ちていることに彼ら 豊かさによって保証すること以外にはない 本格的な経済建設によって革命の成果をイデ 林彪事件はすでに過去のことであって、中国 は気づきながらも、「革命」の空しさを思 書きには、なお幾多のナソを解かねばならな 感じているのであろうか。おそらく、この筋 ソ連逃亡をはかって墜落死したという衝撃的 もあろうに毛沢東暗殺計画を企てて失敗し、 オロギーや精神によってではなく、物質的な のようなとき、中国にとって残された道は、 あるようだが、それは中国人をなにか な筋害を知らされて、いま中国民衆は何を 人間」のように見なす誤った解釈である。こ 人は少しも驚いていないとする見方が 一部に

> である。そして、周恩来は、この点に、 とも自覚的であるように思われる。 もつ

運動や国交回復運動よりも政・財界首脳との 景は、この点からも明らかであろう。 直接的な接触を望み、それを次々に実行しつ 商社よりも大手のビッグ・ビジネスを、 か。最近の中国が、日中関係において、 の存在を改めて認識せざるを得ず、 つ日本の経済力に「期待」していることの背 つのキッカケを待っていたのではなか 以上のような事情をかかえた中国は、 むしろ一 ろう 友好 H 本

## 「さしあたってこれだけは

3

かわらず、このムードが中国 それだけに、日中正常化へのムードに ・インタレストとわが政・財界の政治的 側 0 ナショ B ナ か

ル

THE Tim 福 The The

織ぎ手に

もしものことか

お考えになったら。

こ家庭に

そなえてください

型約余額の10倍

10倍保障 そなえの保険



本社:東京都千代田区内命町 〒100 1-725(代表)

候がすでに出はじめていないかどうか、十分 を成がすでに出はじめていないかどうか、十分 を成がする人びとといわゆる「日中関係者」と目される人びとといわゆる「日中関係者」と目される人びとといわゆる「日中関係者」と目される人びとといわゆる「日中関係者」と目される人びとといわゆる「日中関係者」と目される人びとといわゆる「日中関係者」と目される人びとの実利的コアリションによって国民の罪犯がする。

に考えねばならないところである。

をと、多くの心情主義者たちは、日中復交こると、多くの心情主義者たちは、日中復交こと、のはて和を請うべき聖なる課題であって、それが実現しようとするときに、このようなことをとやかくいうべき聖なる課題であって、それが実現しようとするときに、このようなことをとやかくいうべき聖なる課題であって、それが実現しようとするときに、このようなことをとやかくいうべき聖なるときに、このようなことをとやかくいうべき聖なるときに、「正義の味方」で東西接近をはかったブラント政権ではなしにキリスト教民主党の指導者シュレーダー連にキリスト教民主党の指導者シュレーダー連にキリスト教民主党の指導者シュレーダー連にキリスト教民主党の指導者シュレーダー連にキリスト教民主党の指導者シュレーダー連にキリスト教民主党の指導者シュレーダー連において西独との国交交渉

って、日中間のこうした歴史的・民族的位相 族は、アジアにおける「異母兄弟」なのであ る」固有の関係なのであり、しかも日中両民 ば宿命的に両者が「バスに乗り合わせてい ったり降りたり」することのできない、いわ ば米中関係と根本的に異なって、「バスに乗 ば指摘しているように、日中関係は、たとえ 来に予想される共存・競合関係がもたらす様 は、アジアの二つの大国として日中関係の将 考慮することが可能なのであり、そのために いるときだけに、日本側は、この点を十分に である。中国側が今日のような対応を示して の方向に沿って考えることの重要性について え、どのようなかたちの日中関係の形成がも の問題としてではなく、質の問題として考 れなければならない。なぜなら、私がしばし 様な困難や摩擦についての慎重な考慮がなさ っとも望ましいのかを、日中間の長期的安定 国交の機熟すればこそ、日中関係の打開に当 な「国家外交」を展開しようとしている。 打ちこもうとするなど、きわめて実利主義的 に着手し、ヨーロッパの東西接近にクサヒを って考えるべき点が多いように思われる。 その第一は、日中関係の打開をたんに時間 そのようなとき、わが国にとっては、日中

きわめて危険なことであるといってよい。や、「夢よもう一度」といった中国市場論は、や、「夢よもう一度」といった中国市場論は、を考えたとき、問題をバラ色の幻想でのみ描

ところであるが、あれほどまでにエコノミッ から、すでに出はじめている。この点で「東 影」との格闘に苦悩するアジア諸国のあいだ 勢で対応するのかといった疑念は、「中国の アジア諸国の頭越しに中国にたいし同様の姿 ク・アニマルぶりを示した日本が、今度は、 どのように見るであろうか。日米経済関係の 湾、東南アジアへの進出によって肥りに肥っ することがきわめて軍要であることはいうま とより、これらを含むアジアの全体系を把握 この点で、日米関係、日ソ関係の重要性はも あるアメリカ国民の反応とともに注目される **単裂によって、反日感情がさらに高まりつつ** 意迎えようとする中国の姿を、アジア諸国は 斉に周恩来四条件を受けいれ、たちまちその でもない。つい先日までヴェトナム特需や台 かでとらえる感覚の重要性についてである。 またそのようなわが国ビッグ・ビジネスを鋭 リーダーを中国に派遣しているという姿を、 たわが国ビッグ・ビジネスが急速一転して一 第二には、日中関係を広い国際的視野のな

ていることも忘れてはなるまい。 日イメージが、すでにタイにおいて出はじめ 洋の新しいジュー(ユダヤ人)」(「東洋のジ ュー」とは中国人を指していた)といった対

ピルマン、 ドネシア)、 係(タイ、 リビン、カンボジア)、華僑と現地人との関 政府ゲリラの問題(タイ、マレーシア、 国によって、その浸淡の陰影は異なるが、反 アジアに拡がる「中国の影」は、それぞれの しきれないでいる。いうまでもなく、今日の は日中両大国の「醜い結合」への懸念をかく 流れと表面的には受けとめながらも、 密接な関係(タイ、南ヴェトナム、韓国、フ ヴェトナム、 わが国は、 を占めているという理由からだけではなく、 ジアがわが国対外貿易の約三分の一のシェア を無視することはできないであろう。東南ア 格闘せざるを得ないこれら諸国の苦悩と動揺 など様々な問題をめぐって、「中国の影」と 夢」(インドネシア、カンポジア、ビルマ) アジア諸国は、一方で、日中接近を時代の 反共軍事体制の諸問題(タイ、南 インドネシア)、「革命輸出の悪 マレーシア、シンガポール、イン ニクソン・ショックによって頭越 国境からの脅威と重圧(インド、 韓国、フィリピン)、 台湾との 他方で フィ

> 頭越しを是非とも避けるべきである。この点 るが、これらアジア諸国にたいしては、 外交の真価が問われるべき重要な試金石の一 に、差し迫ったスケジュールのなかで、日本 つがあることはいうまでもない。 しされても自律的にそのショックを回復でき その

外交ではあり得ないのである。世界各国は、 しては、たしかに戦後処理の問題であるに 点が決定的に欠落しており、このことが対日 という視点のみ焦点が当てられた議論が多 題にかんしても、国内問題としての沖縄返還 識の必要性である。わが国では、沖繩返還出 は、 中関係の変化がもたらす国際的影響について すであろうことは疑いない。それだけに、日 政治大国・中国と手を結ぶのだといまや見な 沖縄を見事に「奪回」した経済大国・日本が 際的地位の変化によって、たんなる戦後処理 ても、国際情勢の根本的な変化とわが国の国 が、今日の日中正常化は、日中二国間問題と イメージの電裂をますます深めてしまった く、国際問題としての沖繩返還問題という視 交懸案ではなくなっていることについての認 日中関係の正常化は、たんなる戦後処理的外 第三は、以上の問題と関連するが、今日、 十分な考慮が必要になろう。

> ことに改めて気がついた、というような感が シンジャーに釘をさされて忘れていた大事な 田中首相訪中時期選定にかんする微妙な態度 定し、また自民党訪中先週団派遺計画による 来の浮き足立ったテンポから微妙な変化を示 による軽井沢会談以来、政府・自民党は、従 ているのであろうか。キッシンジャー再訪日 のわが国では、どれほど真剣な考慮がなされ あるのは心もとない の変化を見せはじめているが、いかにもキッ 以上のような諸点について、 椎名副総裁の台湾への特使派遣、 今日、 疾走中

私は、当前、右に見た諸点につい て、十分 99 ) (



な総職さえ確立されるのなら、中国側の主張する日中国交にかんする三原則をまともに受する日中国交にかんする三原則をまともに受けとめて日中交渉に臨むことに、いまやなんら躊躇すべき理由はないと考えている。そしら躊躇すべき理由はないと考えている。そしら躊躇すべき理由はないと考えている。そしら躊躇すべき理由はないと考えている。そしら躊躇すべき理由はないと考えている。そしらいのなが、のなが、中国側の主張ない。そうに高い次元に昇華されて解決され得るであろう。

さらに、具体的な問題点については、このところ「外交一元化」のスローガンのもとにところ「外交一元化」のスローガンのもとに、十分なブレーン・ストーミングと中国研は、十分なブレーン・ストーミングと中国研は、十分なブレーン・ストーミングと中国研なの成果とを全面的に吸収して事に当るべき究の成果とを全面的に吸収して事に当るべきの成果とを全面的に吸収して事に当るべきの成果とを全面的に吸収して事に当るが必要がはまさに、中国と中国人にまとち、日中交渉はまさに、中国と中国人にまとら、日中交渉はまさに、中国と中国人にまとら、日中交渉はまさに、中国と中国人にまといることにありな解釈よりも中国民族の個性的な性格と中国研究の特異なバターンを全面的については、このとことに、具体的な問題については、このところに、具体的な問題については、このところに、具体的な問題については、このところに対している。

と異なって、わが外務省当局は、中国語と中この点で、ニクソン=キッシンジャー外交

国問題は媒能なスペシャリスト外交官をむし国問題は媒能なスペシャリスト外交官を表示を表示としているという懸念がなきにしもあらずであることを、あえて指摘しておきたい。

# 4 「権力の勝者」のめざすべき道

きわめて情緒的な回帰を遂げ、ひとたび中国 巨大さへの郷愁とコンプレックスそしてその ば、切なる使命観とホットな遺任感にとらわ 大陸へ足を踏みいれるや、論理的かつ知性的 ナショナルなエモーションへの共感のなかで れた政治家が、中国のもつ民族的・歴史的な して、このようなパターンのなかでしばし 政治バターンについて考えたものである。そ に賭けることで果たそうとする特殊日本的な たし得なかった大望ないしは責任を中国問題 界での「敗者」が、政治の第一線において果 り、わが国では従来、いずれも現実政治の世 収)。それは、こと中国問題にかんするかぎ ある「諸君!」一九七〇年七月号。拙著 をめざす」と題するエッセーを書いたことが 『中国をみつめて』文藝春秋刊一九七一年所 最後に、私はかつて、「権力の敗者は中国

> は対応の余地は狭まり、もっぱら 政治主義 中国側にたいして、そもそも主体的な対応を ・イデオロギー的に自己の論理を主張する 中国側にたいして、そもそも主体的な対応を まっていることを指摘したものであった。だ が同時に、「権力の敗者は中国をめざ す」と が同時に、「権力の敗者は中国をめざ す」と いう表現は一つのバロディであって、それは 中国問題が息の長い課題であるだけに、「権 力の亡者は中国をめざす」ということになら 力の亡者は中国をめざす」ということになら

きことをも含意していたのである。